

咸宜園門人たちの詩社「玉川吟社」に関する考察

山本 佐 貴

はじめに

小論は、近世における漢詩教育の実態を説明することを目的とした研究の一部をなすものである。ここでは、咸宜園の門人たちが中心となって作った詩社を取り上げ、詩社の性格がどのようなものだったのか、社友にはどのような人々がいたのかを説明していく。

奈良・平安時代には宮廷文学であり、鎌倉から室町に至る時代には禅林文学であった漢文学が、いわゆる庶民のものになったのは江戸時代のことであった。⁽¹⁾特に近世後期には、漢詩に必要なのは格調ではなく、各々の胸中にある活き活きとした性霊を表現することであると主張する性霊説が登場した。⁽²⁾これら反古典主義の風潮によって詩文が平易化したことが、漢詩をたしなむ層を格段に広げる結果となった。こうして近世後期に受容層を広げた漢詩の勢いは、時代が明治に変わっても衰えることはなかった。それは梁川星巖の流れをひく森春海が漢詩専門の月刊誌『新文詩』を、成島柳北が機関雑誌『花月新誌』を発行し、多くの読者を得たことなどからもうかがえる。⁽³⁾明治期の漢詩界の繁栄は、近世後期からの流れの上に築かれたといえるだろう。

この時期の漢詩については著名な漢詩人を扱った研究は多くみられる。加えて、著名な漢詩人が中心となり、文学的活動を目的として結成された詩社を扱った研究もいくつか見られる。⁽⁴⁾しかし、それらの詩社はむしろ特別なものであって、この時期

には無名の漢詩愛好者たちが作った詩社が多く存在していたのである。つまり、近世後期から漢詩をたしなむ人たちが急激に増加したのであるが、その活動が明らかにされている部分は非常に限られているといえるだろう。

広瀬淡窓の咸宜園は、まさにこのような時期に登場した。文化二(一八〇五)年、淡窓二四歳の時に、長福寺学寮を借りて講筵を開くようになったのが始まりで、咸宜園という名称が成ったのが文化一四(一八一七)年、三六歳の時であった。咸宜園が近世最大の漢学塾として知られていることはいうまでもない。しかし、単に漢学といったのではその性格を表現するのに不適当である。咸宜園は経学だけでなく漢詩の教育、作詩能力の育成を行っており、それが重要な位置を占めていた。つまり咸宜園は漢詩教育を特徴とする、いわば漢詩塾とでもいべき性格の塾であった。漢詩教育を特徴とする咸宜園には、淡窓、青村、林外の三代を合わせて、四、一二人という門人が集まった。咸宜園の盛行の背景には、漢詩の受容層の拡大があったといえるよう。門人たちは、咸宜園の漢詩教育をどのように受容し、生涯にわたり漢詩とどのように接していたのだろうか。小論では一事例として、咸宜園の門人が中心となって、東京に作った玉川吟社という詩社を取り上げる。これらの事例を通して、漢詩教育の意義を考察することが小論の目指すところである。

史料には玉川吟社が刊行した詩集を用いる。当時の漢詩隆盛を支えた無名の人々の漢詩とのかかわりに目を向けることは、近世の人々がどのような学習観をもっていたのかを明らかにする一つの手がかりとなるだろう。

一、近世における詩社の状況

現在、名称を知ることのできる詩社のうちもっとも初期のものには、田中桐江が享保九(一七二四)年に摂津池田に開いた呉江社があげられる。その後、次々に設立されたものを列挙すれば以下のようなになる。宝暦年間には竜草廬の幽蘭社(京都)、服部蘇門の長嘯社(京都)、江村北海の賜杖堂詩盟会(京都)、高階暘谷の芙蓉詩社(長崎)など。明和年間には安達清河の市隠堂(江戸)、片山北海の混沌社(大阪)など。天明年間には柴野栗山らの三白社(京都)。寛政年間には市河寛齋の江湖詩社(江戸)、

柏木如亭の二瘦詩社（江戸）、僧雲室らの小不朽社（江戸）など。文化年間には山本北山の竹提吟社（江戸）、文政年間には藤森大雅の清風吟社、天保期には梁川星巖の玉池吟社（江戸）、山地焦窓の禄天吟社（江戸）など。また地方には常陸の楽山詩社、美濃大垣の鳳鳴吟社、信州中野の晚晴吟社、上毛桐生の翠屏吟社、下総銚子の烟波吟社、駿河藤枝・島田の江山社、紀州湯浅の古碧吟社、讃岐高松の玉蘭社、土佐高知の漱玉社、豊後日田の関西社などが存在した。⁹⁾

近世中期以降このように多くの詩社が生まれた背景には、詩文の文学的価値の深まりと社会的浸透があり、それに加えて詩壇における詩風の変化があった。¹⁰⁾ 近世中期、すなわち寛政初年頃まで詩壇において一世を風靡していたのは、荻生徂徠の一派であった。徂徠は人情を洞察する最も有効な手段として詩文を重視した。このことよって従来道徳的政教的に解釈されていた詩文は、経学から切り離されて独自の価値を持つものと認識されるようになったのである。また徂徠は明の李攀龍と王世貞を崇拜し、古典主義を提唱した。しかし、明和・安永の頃になると、厳格に古典主義を墨守する古文辞格調派の詩は、ついに古典の模擬剽窃に陥るといふ弊害を生んでいた。これを批判して登場したのが、山本北山であった。北山は詩に必要なのは性霊であり、格調ではないといふ性霊説を唱えた。性霊とは各々の胸中から流出する活き活きとした靈妙なるものことであり、それを表すために清新といふことを重んじた。北山の他にも僧六如、菅茶山、市河寛齋といった人々よって、性霊派の詩が広められた。詩文の文学的価値が社会に浸透したところに、格調を重んじる古典主義の風潮から、性霊説の登場によって平易なものに移行したことが、漢詩をたしなむ人々を急激に増やす結果になったのである。

詩社ではどのような活動が行われていたのだろうか。先に列挙した多くの詩社の中から、近世漢文学史に重要な位置を占めた詩社を、大阪と江戸から一つずつ取り上げてその様子を見ることにしたい。

大阪の混沌社は明和二（一七六五）年に設立された。¹¹⁾ 詩社には甲会、乙会の二つの会があり、前者は毎月一六日に、後者は二六日に、盟主片山北海の孤雲楼で詩会が行われた。乙会は北海の門下生が中心であった。甲会における結成当時のメンバーをみると、片山北海、平沢旭山ら儒家、葛子琴、佐々木魯庵、福原丹安ら医家、吉田謙齋、岡田南山ら武家、木村兼葭堂、阪東

道齋、田中鳴門といった商家と多彩である。年齢はほぼ二〇代から三〇代が中心であった。結成の後、社友の出入りもありメンバーは増加した。大阪という土地柄、地元の人に限らず、地方から来阪した人たちが社友に加わり一定期間活動する場合も多かったようである。

詩会の様子を伝えるものとして、後に社友に加わった頼春水が在阪當時を回想して記した『在津紀事』がある。

諸子、会業し、題を分かち韻を探り、各々賦し、詩、成るや、几上の一紙を取り之を書す。別に稿を立てず。蓋し腹稿すに熟すればなり。故に書するに臨んで、躊躇する有ることなく、故紙の狼藉する有ることなし。

春水は当時二〇歳を過ぎたばかりであり、詩社の中では年少の部類に入ったであろう。混沌社では詩を紙に書いて何度も書き直すことは認めず、完全に構成した後、いよいよというときに紙に記したのである。作詩に臨む緊張感がうかがえる。これを「腹稿」と呼んでおり、盟主片山北海の師である宇野明霞の作法であったといわれる。

社友、小詩短文と雖も、必ず相ひ示して正を請ひ、而るのち北海に就いて断を取る。北海、詩文あるとき、輒ちまた必ず之を諸子に謀る。年少、余の如きを以てすと雖もまた謀り及び、毫も自満の色なし。

出来上がった詩稿は、互いに見せ合い訂正をし、最終的に北海の講評を求めた。また北海も自分の詩稿に対する意見を社友にもとめ、それは年少のものに対しても変わらなかつたという。年齢や身分に制限されることのない、文学的向上を目指す学習活動が行われていたといえるだろう。混沌社は固定的な目的を持つ結社ではなかつた。いふなれば漢詩に対する関心と熱意を持つものたちの集まりであつた。

これに比して、江戸に結成された江湖詩社は、文学的志向性を強く持っていた詩社であるといえる。¹²⁾盟主である市河寛齋の「或は謂へらく、詩風の変は江湖詩社より始まる」という言葉は、江戸詩壇の詩風革新に対する自負を感じさせるものである。昌平校啓示役に在職していた寛齋が、その職を辞し詩社を結成したのは、先に述べた山本北山が、性靈説を唱導し詩風を転換させようとしていたまさにその時期であつた。当時衰退しつつあつたとはいへ、いまだ詩壇に大きな勢力を占めていた格調派

をおさえ、江戸における詩風を革新するための母胎として江湖詩社を結成したのである。

結成当初の社友は柏木如亭、小島梅外ほか数名であった。後に江湖詩社四才子と呼ばれたのは、先の二人に菊地五山、大窪詩仏を加えた四人である。柏木如亭は寛斎の昌平校時代の門人で、幕府小普請方大工棟梁の職にあった。小島梅外も同じく門人であった小島洪卿の子であった。菊地五山は高松藩儒の家の生まれで、幼い頃より京都に出て柴野栗山に学んだ。江湖詩社に入ったのは五山二〇歳頃のことであったであろう。大窪詩仏は医家の出であった。その後は「驢人才を負う者の従遊すること寔に繁く」という状況で、社友が増加していった。社友の確かな年齢は分からないが、寛斎が四〇歳前後であるのに対し、他の社友たちは二〇代を中心としていたようである。

江湖詩社の社友たちは、詩壇の新風である性靈説を、作詩の上で実践するための試みとして遊里詩を詠んだ。従来、漢詩の詩題として選ばれることのなかった遊里における抒情を詩に表現することで、人間の性情を表そうとしたのであった。寛斎は『北里歌』を、柏木如亭は『吉原詞』を、菊地五山は『続吉原詞』『深川竹枝』を小島梅外は『両国竹枝』を世に出した。

これら江湖詩社の詩に対する評価は高かったが、時代は寛政改革の影響がさまざまな形で出始めたころであった。寛政二（一七九〇）年に好色本類絶版の旨が下達されたのに続いて、寛政異学の禁が出された。昌平校啓示役は辞職していたが、まだ教官であった寛斎に、「学中に異学の書を読むを以て月俸の半を削らる」という処分が下った。この処分によって昌平校の教官をも辞めることになった寛斎は、結果的に江戸を去ることになった。寛斎を失った後は、柏木如亭らが中心となって活動を続けていたが、その如亭も寛政七（一七九五）年に、続いて大窪詩仏、菊地五山もそれぞれ江戸を去った。この状況を寛斎は「但だ愁ふ、詩社寥々として四方に飄散す」と嘆いた。こうして江湖詩社は盟主に続いて、主要な社友が離散したことによって、十数年の活動を終えることになった。

以上、近世後期詩壇に影響力を持っていた詩社の様子をみてきた。しかし、混沌社、江湖詩社のように、詩社の活動が当時の詩壇あるいは詩風に影響を与えたものはそれほど多くはないだろう。これらの詩社に参加した一握りの人々が詩人として名

を残した背景には、あまたの漢詩愛好者が存在したのである。彼らが作った詩社は、果たしてどのような性格を持っていたのだろうか。

二、玉川吟社の性格

広瀬先賢文庫に『玉川吟社小稿』¹³という二巻二冊の詩集を見いだすことができる。これは明治一三（一八八〇）年に発行された詩集である。玉川吟社の様子を知ることがりとなるのは、現在のところこの詩集と咸宜園門人である武谷祐之の自叙伝にみられる以下の記述のみである。

九段阪下組橋玉川堂筆墨ノ商家ニ於テ連月十六日宜園ノ旧門生ヲ会シ詩会ヲナス。青村之ヲ発企ス、門外人ト雖共入社ヲ許セリ。予十年前在京ノ日又今回入京連月往テ会セリ¹⁴

詩社の名前は詩会の会場である筆墨屋玉川堂からとったものと思われるが、この商家が社友のうちのどの人物のものかは定かではない。詩会は毎月一六日に定期的に行われていた。また、咸宜園の二代塾主である広瀬青村が発起人であったことが分かる。「門外人ト雖共入社ヲ許セリ」とあり、社友は咸宜園の門人だけではなかったことも窺える。ここに作品を載せている三八名の一覧を表に示した。咸宜園の門人は確認できただけで一名であった。彼らはおよそ天保、弘化年間に咸宜園で学んだ門人たちである。編者をはじめ中心的人物が咸宜園の門人であることなどから、玉川吟社は咸宜園と関わりの深い詩社であったといえる。

玉川吟社の結成がいつのことであるか、さらに存続期間はどれほどであったのかは判然としない。発起人とされている広瀬青村は明治九（一八七六）年に修史局三等修撰に任じられた。この時同局には、咸宜園門人であった長三洲も出仕しており、あるいはこの頃が結成時期ではないかとも思われる。また、先の武谷祐之の記述は明治二一（一八八八）年のことを書いたものである。「予十年前在京ノ日又今回入京連月往テ会セリ」とあるので、少なくとも明治一〇年頃から二〇年前後の間活動してい

たことは確かである。

『玉川吟社小稿』の「題言」を記したのは、会津出身の南摩綱紀であつた。⁽¹⁵⁾古賀謹堂に学び、併せて洋学も修めた。後には東京大学教授・東京高師教授を務めた人物である。南摩の題言に、「諸子相会す組橋玉川堂、毎月一次、名づけて曰く玉川吟社⁽¹⁶⁾」とある。武谷祐之の記述と一致する。『玉川吟社小稿』には見開きの頁に「玉川吟館図」と書かれた絵が添えられている。⁽¹⁷⁾川の流れのそばに建てられた二階建ての家屋が描かれ、一階では十数名、二階にも二、三名がそれぞれ集まって詩を吟じている様子である。「詩成りて、鼎輪して之を評す論を極め批を切す」と書かれているのを見ると、詩をめぐって激しい議論が展開されていたようである。

詩集では、各々の詩の後ろにそれに対する他者の批評が載せられている。この批評の傾向から、玉川吟社においてどのような詩が理想とされていたのか推察できるだろう。一首に対して複数人の批評が付いている場合もあれば、全く付いていないこともある。批評をしている人物を、その数が多い順にあげると次のようになる。堤静斎(四七)、長三洲(一六)、南摩綱紀(一五)、那珂梧楼(一四)、吉雄菊瀨(七)、富谷潤谷(七)、秋月橋門(五)、広瀬青村(三)、青木樹堂(三)、石井南橋(二)、浦田改亭(一)、長古雪(一)、長梅外(一)といった人々である。先の一覧を見れば、これらの人々は掲載されている詩の数も、他の社友に比べて多い傾向にあることがわかる。ただ、発起人であるという広瀬青村については、掲載された詩の数も批評の数も少ないことは意外に思われる。しかし、これらの人々が玉川吟社の中心的人物であつたと考えてよいだろう。

玉川吟社が咸宜園門人を中心とした詩社であつたからには、その詩社が理想とする詩について考える際、淡窓が理想としたのはいかなる詩であつたのかおさえておく必要があるだろう。淡窓が幼い頃に漢詩を学んだ師は、松下西洋にしても、僧法蘭にしても古文辞格調派の信奉者であつた。⁽¹⁸⁾そして一六歳の時、念願かなつて福岡の亀井塾に入門するが、ここで漢詩の添削を受けた亀井南冥も、やはり荻生徂徠の門人僧大潮に学んだ古文辞格調派であつた。よつて淡窓が受けた漢詩教育は唐詩を理想とし、他の時代のもの特に宋詩を排斥する古文辞格調派の教えであつた。しかし、遊学中にたまたま手にした『唐宋詩醇』と

『玉川吟社小稿』に詩を掲載している社友一覧

氏名	称、字、号等	住所	詩編	評数	入門年※	生没年、著書等
青木可笑	樹堂、陽春	愛知	4	3		明治14年4月75歳で没。
秋月(水筑、劉)伯起	橋門、龍、小相	大分	6	5	文政7年	文化6年生まれ、明治13年4月72歳で没。『橋門韻語』
浅沼介郎	巨眼		1	0		
綾部燦	葛里	長崎	2	0		
有馬天然		石川	1	0		
池上誼三	泰川	岡山	7	0		
石井太奇	南橋、陸摩、子龍、滝次、竹陽	福岡	5	2	天保13年	明治20年7月57歳で没。『南橋先生夜話』
浦田長民	改亭	三重	2	1		
大郷穆	学橋	石川	2	0		
香坂宗寛	雲山	東京	2	0		
片山重範	猶存		2	0		
清川寛	楊川	新潟	2	0		
倉富胤篤	篤堂、熊三郎、八兵衛	福岡	1	0	天保15年	明治23年62歳で没。『鄙記随記』『遊崎那伊集』
後藤敬臣	柳処	山口	5	0		
後藤昌綏	鏡耕	岐阜	2	0		
城井国綱	錦原	福岡	2	0		
関忠敬	雪江、弘道、忠藏	茨城	4	0		明治10年11月51歳で没。
田代俊二	潤卿、青溪	福岡	2	0	天保15年	明治11年43歳で没。
棚橋大作	松村、嘉忠、伯貫	岐阜	2	0	天保年間	明治26年5月67歳で没。旭荘の門人。
棚橋絢子	梅苞	岐阜	2	0		天保10年生まれ、昭和14年9月101歳で没。松村の妻。
長世文	梅外、允、南梁	山口	9	1	文政・天保年間	長三洲の父。明治18年10月76歳で没。『梅外詩抄』『詩書評釈』『左伝尋儀』
堤正勝	静斎、十郎、威卿、省三	東京	7	47	弘化年間	明治25年11月66歳で没。
遠田澄	木堂、澄庵法眼	東京	1	0		
富谷嘉平	潤谷	東京	2	7		
長茂	三洲、世章、光太郎、富太郎、秋史、南陽、珠陽、韻華、主馬	山口	10	16	弘化2年	明治28年2月67歳で没。
那珂通高	梧楼	岩手	11	14		
長冰	古雪、革、土金	山口	8	1	安政3年	長梅外の子。明治19年没。
南摩綱紀	羽峯	青森	6	15		
橋詰敏	朴斎	高知	1	0		
広瀬進一	雪堂	滋賀	1	0		
広瀬範	青村	大分	3	3	天保5年	明治17年12月66歳で没。
藤田憲	吳江	石川	2	0		
松本嘩	白華	石川	1	0		
水谷弓夫	典嶺	岐阜	1	0		
宮崎信道	蘇庵	長崎	2	0		
森魯直	春濤	愛知	4	0		文政元年生まれ、明治22年11月71歳で没。
吉雄敦	菊顔、公礼、蔵六	福岡	7	7	天保12年	明治24年10月63歳で没。

※ 威宜園の門人であることが判明したものについて、その入門の年を記した。

出典：『玉川吟社小稿』、『威宜園出身八百名略伝集』、『近世漢学者著述目録大成』

の出会いによって、「作ル所ノ詩モ、又随ッテ一変」したという。

淡窓が最終的に確立した詩風はどのようなものだったのだろうか。彼は格調説も性靈説も一時の流行に過ぎないと、否定的に捉えていた。⁽²¹⁾ 淡窓が陶王孟韋柳、すなわち陶潛(陶淵明)、王維(王右丞)、孟浩然(孟襄陽)、韋応物(韋蘇州)、柳宗元(柳河東、柳柳州)を好んだことは、自身の言葉にも、また門人の言葉にも表れている。これらの詩人を理想とし、その詩の境地、すなわち古調・清澄・平澹・幽遠といった詩境を目指すのは神韻派の主張である。また淡窓が、神韻説を首唱した王漁洋を推重していることなどからも、淡窓を神韻派とする説もある。⁽²²⁾ しかしながら、淡窓は「予ガ好ム所ハ、性情ヲ主トシテ格調ヲ廢セズ、二ツノモノノ中ヲ取ルナリ」といい、必ずしも格調説、性靈説を否定するものでもなかった。淡窓の詩論はもともと神韻説に近く、特定の説や時代、人物にかかわらず、優れたものに学び、そうでないものを斥けるのが基本的な姿勢であったといえるだろう。

さて、玉川吟社の詩風に話を戻そう。まず、批評の中に特定の詩人の名前が出ている例をあげると、長古雪の「秋暁」と題する三首の内一首についての批評に「静斎云、韋に似たり、柳に似たり、三首中之翹楚」というものがある。⁽²⁴⁾ 韋はすなわち韋応物、柳はすなわち柳宗元であり、淡窓の好んだ詩人である。また、詩中の一字から想いがほとばしるようであるとしたりした上で、「(静斎云)此の格老杜多く之を用いる」と述べたものもある。その他には「静斎云、陸劍南(陸放翁：筆者註)之口吻」、「趙甌北佳処」、「橋門云、一結頼山陽口吻」などがあつた。韋応物、柳宗元は中唐、杜甫は盛唐、陸放翁は南宋、趙甌北は清時代の人であり、特定の時代を理想として掲げるといふ姿勢は見られない。日本人としては頼山陽もあがつている。ここにあがつた詩人たちは、いずれも咸宜園の講釈でその詩が講じられていた。

技法に関する批評に、比喩について述べたものがある。「静斎云、全首比喩を用い、良匠意所を得る」、「梧棲云、先ず比喩の下、然る後題に入る、真に是老手段」などである。また、舟遊びの情景を詠んだ詩の落句に、「楊柳烟の如し」という語があるのを指して、「(菊瀨云)亦是画家の粧点法」であると評しているものもある。このように技法にこだわるものがある一

方で、「静斎云、澹々と筆を着け、雕琢を用いず、却って旨趣言外に在るを覚ゆ」⁽³²⁾や「静斎云、真率却て好」と、技巧に凝らずさっぱりしたものをよしとするものもある。また筆の勢いのあることを評価する「静斎云、筆勢宛転、僚之丸を弄ぶが如し、何等巧手」⁽³³⁾や「羽峯云、輕輕と筆を着く、亦佳趣有り、以て大家と為す所」⁽³⁴⁾などもみられた。

詩の趣について触れたものでは、「静斎云、気骨蒼勁、風神瀏然」⁽³⁵⁾として、もしこの一首を古人の詩の中に紛れ込ませても、誰が識別することができるだろうかとしたものがある。このように古調あるいは古意を尊ぶものには、「静斎云、適勁蒼古」⁽³⁷⁾や、「樹堂云短古上乘」⁽³⁸⁾などの評があった。しかし、新しい試みを決して拒むものではなかったことは「風船」と題する詩に対して「三洲云、奇想」⁽³⁹⁾とその着想の珍しさを指摘するものや、「菊瀨云、造語驚人、奇して險うからず」⁽⁴⁰⁾という批評が付けられていることから知ることができる。

詩の趣を表すものとして最も多くみられたのは、その幽遠さ、淡然としたさま、あるいは清く穏やかなさまを指摘するものである。例をあげると「静斎云、前首輕妙、後首幽遠」⁽⁴¹⁾、「静斎云、幽峭」⁽⁴²⁾、「羽峯云、輕淡喜ぶべし」⁽⁴³⁾、「羽峯云、清絶又幽絶」⁽⁴⁴⁾、「青村云、一起清拔」⁽⁴⁵⁾、「梧楼云、清穩」⁽⁴⁶⁾、「梧楼云、瀟洒喜ぶべし」⁽⁴⁷⁾、「梧楼云、澹として味有り」⁽⁴⁸⁾などである。これらは先述した神韻派の詩の特徴であるといつてよいだろう。

以上『玉川吟社小稿』の批評から、玉川吟社が理想とする詩がどのようなものであったかを見てきた。玉川吟社は特定の時代や人物あるいは特定の説を理想としていたとはいえない。ただ、古調・清澄・平澹・幽遠といった神韻派の傾向が見られることは確かである。淡窓の詩論との共通性がみられる。ここでは詳しくみることはできなかったが、詩の題材に「楠木正成」「小早川隆景」といった武将が少数ではあるが選ばれ、勤王を詠ったものもあった。このような詩は淡窓にはみられないもので、時代の推移をも感じさせる一方、玉川吟社が完全に淡窓の詩を継承したものではないことを示している。

三、玉川吟社の社友

二では玉川吟社の性格を詩集の題言、詩に対する批評などからみてきた。では、実際詩社にはどのような人たちが社友として参加していたのだろうか。ここでは、評者を中心にみていきたい。

最も多くの批評を行っていた堤静斎は、編集者であり詩集の「引」も記した。静斎は咸宜園の門人であった。⁽⁴⁹⁾伊予の出身で、弘化年間淡窓に学び、嘉永年間に江戸へ出て安積良斎についた。後に昌平校に入り、元治元(一八六四)年には徒士目付となった。慶応元(一八六五)年の征長戦争に従事し功績があった。維新後の明治一(一八七八)年には、「知新学舎」を東京飯田町に開いた。

先に触れた長三洲は弘化二(一八四五)年に一三歳で淡窓の門に入った。⁽⁵⁰⁾旭荘が大阪に開いた塾に都講として迎えられ、ここで長州藩とかかわりを持ち、父梅外とともに尊攘運動に加わるようになった。そのため幕吏に追われる身となり、長州藩に逃れ高杉晋作の奇兵隊に参加した。維新後は木戸孝允の引き立てにより、文部大丞となった。長梅外、長古雪はそれぞれ三洲の父、弟である。彼らもまた咸宜園門人であった。三洲は咸宜園在塾中、広瀬林外、田代青溪と併せて三才子と呼ばれていた。青溪もやはり社友であるが、『玉川吟社小稿』刊行当時は既に故人であった。⁽⁵¹⁾彼は咸宜園を出てから、京、大阪に学び、明治初年に福岡藩に召されて儒官となった。明治五(一八七二)年山口県に招かれ、下関の田中学問所に入り教授した。さらに翌年には京都に、同九(一八七六)年には岩手に出仕したが、この年四四歳の若さで没した。

那珂梧楼は盛岡藩の医家に生まれ、江戸に出て安積良斎に学んだ。⁽⁵²⁾ここで堤静斎とのつながりが出来たと考えられる。後、儒官として盛岡藩に仕えるが、維新後は大蔵省・文部省に出仕した。梧楼は明治一二(一八七九)年五月に亡くなっており、『玉川吟社小稿』が刊行された時には故人であったことになる。藤田呉江の「那珂梧楼を悼む」という一篇の詩も収められている。

吉雄菊瀨は天保一二(一八四一)年に一三歳で咸宜園に入門した。⁽⁵³⁾父は小倉藩侍医であった吉雄宗親で、やはり淡窓の門人であった。弘化三(一八四六)年には秋月の江藤泰養から医学を学び、同四年長崎へ游学、さらに嘉永元(一八四八)年大阪で緒方洪庵の門に入った。その後長州藩の青木周弼にも学び、安政二(一八五五)年郷里に帰って藩校の教授を務めた。明治五(一八七二)年医学を捨て、民部省勧業寮に出仕した。

秋月橋門は文政七(一八二四)年入門の古い門人で、淡窓が優れた門人一八人を選んで作った「十八才子の詩」に詠まれた一人でもある。⁽⁵⁴⁾亀井昭陽にも学び、後に佐伯藩藩校の教授となった。明治元(一八六八)年から同三年までは、葛飾県知事を勤めた。

広瀬青村は淡窓の養子となつて咸宜園の塾主となつた、矢野範治である。⁽⁵⁵⁾安政二年に淡窓から塾政を継承、文久二(一八六二)年に林外にこれを譲り、青村は府内藩藩校の監督となつた。明治二(一八六九)年に京都漢学所に出仕、その後京都府典事、岩手県権参事、修史局修撰、学習院教授、宮内省文学御用係を歴任した。また、この間、東宜園と称する家塾を東京牛込神楽町に開いた。明治一五(一八八二)年、江戸幕府の甲府学問所を前身とする山梨県立山梨学校の校長に迎えられ、校名を学問所時代の「徴典館」に戻し、漢学科を設けるなどの業績を残した。

青木樹堂は尾張知多郡の大高村長寿寺の住職であった。後に還俗し大蔵省に出仕した。

石井南橋は筑後吉井の大庄屋に生まれ、天保一三(一八四二)年一二歳で咸宜園に入門した。席次は九級に至り都講をも勤めた。⁽⁵⁶⁾維新後、東京に出て大蔵省、内務省等に出仕し、さらに新聞「明治日報」を刊行した。

その他には、梁川星巖に詩を学び茉莉吟社という詩社を設立、神韻派の詩人として明治の詩壇に名のあつた森春濤や、⁽⁵⁷⁾明治から昭和初年にかけて女子教育家として活躍した棚橋絢子も社友に名を連ねている。⁽⁵⁸⁾

玉川吟社社友で多少なりとも経歴などが分かつた人物は、三八名中一七名である。一七名を以て玉川吟社を代表させることはできないが、ここに略記した人物は先にも述べたように、詩社の中心的存在であつたことは間違いない。ここから玉川吟社

は、咸宜園の旧門人が中心となつてゐること、藩に儒官あるいは医官として出仕した経歴、維新後には官途に就いた経験をもつものが多く見られるということがいえる。また、生没年が判明した人物については、明治一三年の『玉川吟社小稿』刊行当時の年齢は、およそ五〇代から六〇代であつた。混沌社や江湖詩社の社友に比べると、高齢であることがわかる、玉川吟社社友は、漢詩を業とするいわゆる漢詩人たちの集う詩社ではなかつたといえるだろう。彼らは他に身を立てるすべを持ち、既に社会的にある程度の地位を築いている人々であつた。咸宜園の門人たちは、咸宜園を出て他の学習機関を経て、あるいは何らかの職についても、漢詩から離れることはなかつたといえよう。そしてそれが咸宜園門人に限られるものではなかつたために、玉川吟社という詩社が門人以外の人をも含み込んだ形で存在したのである。

玉川吟社については、設立経緯やその後の活動、そしてかかわつた人々の詳細など、調査すべき事柄は多く残されている。社友一人一人にあたり、彼らの交遊などからさらなる調査に努めたい。

おわりに

玉川吟社は、明治初期に咸宜園門人が中心となつて作つた詩社であつた。それは混沌社や江湖詩社のように詩壇を動かすような働きを果たした詩社ではなかつた。社友たちはそれぞれ既に身を立てるすべを持つており、何か特定の目的のために学ぶという学習とは異なり、自らの愉しみとして漢詩を学んでいたといえるだろう。近世にはすでに教育を人材育成の手段とする考え方が生まれ、そのような学習観が「教育爆発」を促したとされる⁹⁹。しかし、何かの手段としての学習とは別に、学習そのものを目的とした学習活動が存在していたことも事実ではないだろうか。小論では一事例を挙げるにとどまつたが、自らの愉しみとして学ぶという学習観が、近世近代の日本にどのくらい普及していたのか、さらにどのように変容して行つたのか、またこのような学習観が果たした役割はなんであつたのかという問題に引き続き取り組んでいきたい。

- (1) 神田喜一郎「日本の漢文学」(『岩波講座日本文学史』第16巻、一九五九年、三二頁)参照。
- (2) 中村幸彦「近世儒者の文学観」(『岩波講座日本文学史』第7巻、一九五八年、三〇頁)参照。
- (3) 前掲論文1(三五頁)参照。
- (4) 多治比郁夫「平沢旭山と混沌詩社の成立前後」(『大阪府立図書館紀要』7、一九七一年)、頼惟勤「大阪の混沌詩社―江戸時代後半期の漢詩社―」(『斯文』48、一九六七年)、揖斐高「江湖詩社と遊里詞(上)(下)」(『国語と国文学』51(3)(5)、一九七四年)など。
- (5) 海原徹「近世私塾の研究」(思文閣出版、一九八八年、五一頁)など参照。
- (6) 拙稿「咸宜園における漢詩講釈の展開」(中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第45巻、第1部、一九九九年、一六七頁)参照。
- (7) 井上義巳『広瀬淡窓』(吉川弘文館、一九八七年、二〇六頁)参照。明治三〇年の閉塾までを合わせると、四、八〇〇名あまりとなる。
- (8) 以下揖斐高「漢詩の隆盛」(『岩波講座日本文学史』19世紀の文学』第10巻、岩波書店、一九九六年、二四頁)参照。
- (9) 同上(二四頁)及び松下忠『江戸時代の詩風詩論―明・清の詩論とその撰取―』(明治書院、一九六九年、八一―八二頁)参照。
- (10) 以下主に前掲論文1を参照。
- (11) 以下梅溪昇編『大阪府の教育史』(思文閣出版、一九九八年)、多治比郁夫「宝曆の大阪詩壇」(『近世大阪芸文叢談』大阪芸文会、一九七三年)、前掲論文4(多治比論文、頼論文)を参照。
- (12) 以下主に前掲論文4(揖斐論文)を参照。
- (13) 堤静斎編『玉川吟社小稿』(石川治兵衛、明治13(一八八〇)年)。関儀一郎・関義直編『近世漢学者著述目録大成』(東洋図書館)によれば4巻本であるが、広瀬先賢文庫は、後2巻を欠いている。
- (14) 井上忠校訂「武谷祐之『南柯一夢』巻之三の巻 付録」(『九州文化史研究所紀要』一九六九年、二二七頁)。
- (15) 関儀一郎・関義直編『近世漢学者著述目録大成』(東洋図書館刊行会、一九四一年、三八二頁)、以下南摩綱紀に關しては同書参照。

- (16) 前掲書13(4丁オ)。
- (17) 同上(2丁ウ、3丁オ)。
- (18) 同上(4丁ウ)。
- (19) 肥田明啓「広瀬淡窓と袁牧」(『学林』28-29、一九九八年、三二九頁)。
- (20) 広瀬淡窓『懐旧楼筆記』(巻8、九九頁)。
- (21) 広瀬淡窓『遠思楼詩鈔』(上巻、四頁)。
- (22) 前掲書9(松下著作、六七八頁)。
- (23) 広瀬淡窓『淡窓詩話』(上巻、七頁)。
- (24) 前掲書13(巻1、13丁オ)。
- (25) 同上(巻1、8丁オ)。
- (26) 同上(巻1、15丁ウ)。
- (27) 同上(巻2、24丁ウ)。
- (28) 同上(巻2、36丁ウ)。
- (29) 同上(巻1、1丁ウ)。
- (30) 同上(巻2、44丁オ)。
- (31) 同上(巻2、42丁オ)。
- (32) 同上(巻1、4丁ウ)。
- (33) 同上(巻2、24丁ウ)。
- (34) 同上(巻1、11丁ウ)。

- (35) 同上(卷2、43丁オ)。
- (36) 同上(卷2、43丁オ)。
- (37) 同上(卷1、20丁オ)。
- (38) 同上(卷1、9丁ウ)。
- (39) 同上(卷1、13丁ウ)。
- (40) 同上(卷1、13丁ウ)。
- (41) 同上(卷2、33丁オ)。
- (42) 同上(卷2、34丁ウ)。
- (43) 同上(卷2、32丁オ)。
- (44) 同上(卷2、45丁オ)。
- (45) 同上(卷1、9丁オ)。
- (46) 同上(卷2、32丁オ)。
- (47) 同上(卷2、33丁ウ)。
- (48) 同上(卷2、37丁オ)。
- (49) 中野範『威宜園出身八百名略伝集』(広瀬先賢顕彰会、一九七四年 一四二頁)、前掲書15(三二七頁)、以下堤静斎に關しては同書参照。
- (50) 前掲書49(一三八頁)、前掲書15(三二二頁)、以下長三洲に關しては同書参照。
- (51) 前掲書49(二二八頁)、以下田代青溪に關しては同書参照。
- (52) 前掲書15(三四九頁)、以下那珂梧楼に關しては同書参照。
- (53) 前掲書49(二〇六頁)、以下吉雄菊瀨に關しては同書参照。

- (54) 前掲書49(三〇頁)、以下秋月橋門に關しては同書参照。
- (55) 前掲書49(一六三頁)、以下広瀬青村に關しては同書参照。
- (56) 前掲書49(四一頁)参照。
- (57) 前掲書15(五一六頁)参照。なお永井荷風『下谷叢話』には、森春壽に關して多くの記述が見られる。
- (58) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』(第9巻、吉川弘文館、一九八八年、二五九頁)参照。
- (59) 入江宏『講座日本教育史』(第2巻「近世II・近代I」)や、辻本雅史『近世教育思想史の研究―日本における「公教育」思想の源流―』(思文閣出版、一九九〇年)など。